
新世纪グラハムゲリオン

ライナス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新世紀グラハムゲリオン

【NZコード】

N4415P

【作者名】

ライナス

【あらすじ】

巨大ELSに特攻し、戦死して別の世界へ来てしまったグラハム・エーカー。彼はこの世界で何をするのか。

使徒襲来（前書き）

思いついたらすぐやってしまつライナスです。

「おい、いつの更新はまだか！？」

わかつてゐるてあとちよつと待つててくれ。えーと元々エヴァは苦手だったんですがこの機会に克服しようつかと。小学生の頃は初号機の暴走シーンを見たらすぐダウソしました。最近は大丈夫ですけどwwwエヴァの情報源はウイキペディアとコーチューブです。ガンドムはだいたいわかつてるので動画くらいですね。それではどうぞお楽しみください。（どうじよつ終盤は量産型であるし、あのでかい綾波も出るんだよなあ夢に出できやつだ）

グラハム「往け、少年！ 未来をその手で切り拓け！！」

そう言い、一人の男が巨大ELSに特攻し、戦死した。

名はグラハム・エーカー、スペック上できなかつたとされる、モビルスーツによる空中変形を平然とやつてのけた男である。ガンダムに盟友を殺されたり、ガンダムと相討ち、それでも生き残り、再びガンダムに挑むものの今度は完全にこちらの負けであった。そして新たな愛機ブレイヴを駆り、自分の命と引き換えに巨大ELSに大穴を作つた。

目が覚めると自分はコックピットに座つていた。

グラハム「天国では・・・なさそうだな」

とりあえずここが何処なのかを調べるために移動を開始した。一つ気になるのだが先程までは宇宙だったはず。

グラハム「（だがどうして地上に？）」

そこで考えるのをやめた。

グラハム「熱源反応？ 10 20機ぐらいのヘリか・・・！なんだあれは！」

そこには巨大な怪物が立つていた。

一方こちらはネルフ本部。

『正体不明の移動物体は依然、本部に対し進行中』

『目標、映像で確認。モニターに回します』

冬月「15年ぶりだね」

ゲンドウ「ああ、間違いない。使徒だ」

戦自兵士「目標に全弾命中！うわあ」

確かに当たつたのだが使徒は無傷だった。プロペラを破壊されたへ

リはそのまま街に落下、その場にいた碇シンジの前に落ちた。そこに使徒が飛び踏みつけ機体が大破し、爆風が起きた。

シンジ「うわ！」

そこに青いルノーが突っ込んできた。

？？？「ごめん！お待たせ」

葛城ミサト、写真に写っていた人物だ。

ミサトとシンジが本部に到着した頃、グラハムは徐々に怪物に接近していた。

グラハム「M5でどこまでやれるかはわからないが、やってみる価値はある！」

全速力で目標に向かつた。

マヤ「！熱源反応確認、物凄いスピードで戦闘領域接近しています！モニターに出します！」

冬月「なんだあれは…戦自の新兵器か？」

ゲンドウ「いや、それは無いな、知ついたら最初から出しているだろう」「

マヤ「謎の機体、変形しました！」

冬月「可変する人型兵器か・・・」

ゲンドウ「今の時代の技術では作れるとは思えん」

グラハム「人呼んで、グラハムスペシャル！」

グラハムスペシャルとは変形しながら突撃する技。名付けたのはビリー・カタギリ。

サキエルにそのまま突撃。が、A・T・フィールドによつて無効化されてしまった。

グラハム「なに！？」

サキエルは槍のような形状をしたパイルで攻撃した。2・3度回避はしたもの、サキエルの二個目の顔から発射された光線が頭部を貫通した。

グラハム「私のフラッグに傷をつけたな・・・」「
ビームサーベルを2本抜き、突撃を開始した。

グラハム「今日の私は！阿修羅さえも凌駕する存在だ！」「
最大出力でサキエルを押し込み、サーベルでフィールドを斬り裂き
相手が怯んでいる隙に＊1高出力ビームサーベルを抜刀し

グラハム「隙ありいいいい！！」

高出力ビームサーベルがサキエルのコアを貫いた。サキエルの動き
は完全に停止した。

グラハム「私の勝ちのようだな・・・」

マオ「パターん青、消滅しました・・・」

ミサト「嘘でしょ・・・」

リック「エヴァ以外がフィールドを破るなんて・・・」

誰もがそう思つてしまふ、なぜならA・T・フィールドを破るには
同じものを持つているエヴァにしかできないはずだった。

ミサト「と、とりあえず通信してみましょう

マオ「了解です」

グラハム「頭部を貫通したのは結構危なかつたな、半分見えなかつ
たぞ」

損傷チェックをしていたグラハムに通信が入った

グラハム「通信？一体誰が・・・」

ミサト「そのパイロット、私の声が聞こえますか？」

グラハム「ああ、聞こえている」

ミサト「ちょっと貴方と話がしたいんだけど、そこに倒れている初
号機と一緒に来てくれるかしら

「本部まで誘導するから、と女は言った。

グラハム「了解した。そちらの方が好都合だ、それに初号機とは？」

ミサト「それも後で話すわ

と言い、通信を切った。

グラハム「初号機は・・・あれか」

初号機は紫色の巨人のことだろう。グラハムはそれらしい物を見つけ、誘導にしたがい本部に着いた。

グラハム「（しかしこの初号機といふやつはどうもロボットからかけ離れているな、ロボットと言つよりは生物じゃないか？）」「とりあえず指定されたガレージに機体を置いた。

機体から降り、そこで棒立ちしていると聞き覚えのある声が聞こえてきた。

ミサト「その機体に乗つてたパイロットさんねー」

「みちよ」
先程通信してきた女性だろう。道中何個か質問し、情報を手に入れた。

エヴァンゲリオン、A・T・フィールド、使徒、この三つ。

そういうしている間に「指令室」の前に到着した。

ミサト「葛城ミサトです。例のパイロットを連れてきました」

ゲンドウ「入れ」

ミサト・グラハム「失礼します」「

冬月「君があの機体のパイロットか」

グラハム「はい。連邦軍所属ソル・ブレイヴス隊隊長、グラハム・エーカー少佐です」

冬月「君はどこから来た？」

グラハム「それが自分にもよくわかりません。戦場で死んで気づいたらこの世界に居ました」

冬月とミサトは驚愕したがゲンドウは口の前に手を組んだまま、得に反応は無かつた。

冬月「この世界の者ではなかつたのか、それならば機体の方も納得できるな。あとあの機体の背後からオレンジ色の何かが出ていたがあれは？」

グラハム「GNドライブから出るGN粒子の事ですね。機体制御、飛行、ビーム兵器に転用されていて簡単に言えば動力源です。しか

し人体に対しては有害で、細胞を損傷すると、その部分は侵され再生医療は不可能となってしまいます。元々私たちの物ではなかつたのですがある組織で誰かが裏切り、オリジナルの太陽炉のデータを基にした疑似太陽炉と30機もの機体が送られました。ただし、オリジナルは条件次第で人体を癒やす効果があるそうです。例えば、死んだはずの人が再び息をするようなものですね」

冬月「なるほど。それとある組織とは?」

グラハム「私設武装組織ソレスタークビーイング、『武力による戦争の根絶』を掲げ、全戦争行為に対し機動兵器“4機のガンダム”で武力介入した組織です。その内の一機には毎度毎度殺されかけました。ですが最後は共に人類を守るために闘いました。私はその戦いに活路を開くために特攻し、戦死しました」

ミサト「で、さっきの話って本当なの?」

グラハム「私が嘘を言っているとでも?」

さっきの会話でネルフ内を移動してもいいという許可が下りた。もつとも初号機を助けたのが一番の理由だろう。

ミサト「そういうわけじゃないんだけどさ~」

というミサトを無視してグラハムは考え方をしていた。

ミサト「どしたの?」

グラハム「いや、初号機のパイロットに会つてみたいと思ってな」

ミサト「今はネルフの病院にいるわ、明日にしなさい」

グラハム「む…私は我慢弱いのだが仕方ない」

で、また気になることが一つ。

グラハム「私は何処で寝ればいいんだ」

ミサト「あ、そうそう、私たちの部屋の隣に借りといったわよ

」こうしてグラハムのこの世界での生活が始まった。

使徒襲来（後書き）

うーむちやんとグラハムぽかつたかなあ あとブレイブの武装完全に忘れてしまつたのでコメントで教えて下さるとありがとうございます。

* 1GNフラッグが好きだったので装備させてもらいました。（高出力ビームサーベル）
ではまた次回。

ガテラーザ開発計画、始動。（前書き）

久しぶりの投稿です。今回はとある計画がスタートするようですが。
・・・・・追記1：サブタイトルを少し変更しました。追記2：間を開けて書いた方が読みやすいという感想を頂いたので少し空けました。

ガテラーザ開発計画、始動。

グラハム「朝か……」

あちらの世界では寝る暇などほとんどなかつた。

グラハム「朝食でも頂くとするか」

ミサトからもらつたパンを一つ食べながら新聞を読む。

グラハム「（一）昨日の事がまったく書かれていないだと……」

極秘：か。だが何故かブレイヴだけ載つていた。『このロボットの正体は！？続報を待て！…』という記事だつた。

グラハム「それにしても、まったくやることが無いな」

最初は病院に行くつもりだつたが「いや、いきなり知らない人に見舞いに来られても混乱するだけよ」と断られてしまつた。確か例のパイロット…碇シンジだつたか、近くの第壱中学校に転入するらしいな。

ああ、本当にやることが無い。ネルフにでも行くか。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

玄関を出るとミサトが家から出でてくるところだつた。こちらに気づくとあ、といい近寄つてきた。

ミサト「いいタイミングで出てきたわね。リックがあなたの機体について知りたって言うからさあ、来てくれない？」

グラハム「ふむ、いいだろう。こちらも暇だつたしな」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ミサト「さて、ここが技術開発部技術局第一課よ」

グラハム「ずいぶん長い名前だな」

ミサトがドアにノックをし、中に入つて行つた。

ミサト「リック、連れてきたわよ」

リック「あら今回は速かつたじゃない」

ミサト「う、うるさいわね！じゃ、私は戻るから」

そう言つて去つて行つた。

リック「初めてまして、私は赤木リック。でそこに座つてているのは伊吹マヤよ」

マヤ「初めてまして」

グラハム「よろしく頼む」

グラハムは適当に空いている席に座ると同時に資料を置く。

マヤ「何ですかそれ？」

グラハム「資料だ」

・・・・・

一通り見たが、最後に残つたのは何枚かのDVD。

グラハム「これは知らないな」

リック「じゃ、見てみましようか

数十分後・・・・・

DVDにはそれぞれの機体紹介をしていた。

・・・・・・・・・・・

ガデラーザ機体説明。

マヤ「ガデラーザって大きいくせにスピードもパワーもあるんですね」

リック「まるで動く武器庫ね。154個・・・ふざけてるわ」

グラハム「だが相手が悪かつたな」

その他色々機体があつたがガデラーザがあまりにもめだつていたため見るのが忘れていた。（ブレイヴは資料のみ）

リック「技術者の魂が燃えるわ！」

マヤ「あ、あの～先輩？まさか作る気じゃ・・・」

グラハム「疑似GNドライブはどうするつもりだ。7個も必要だぞ」

リック「データがあるじゃない」

グラハム「なるほど、ではGNファング×154とGNミサイル×

265は？」

リック「「ネルフの技術力をなめるんじゃないわよ！さつそく司令に頼んでくるわ！」

勢いよく飛び出していった。

マヤ「先輩・・・大丈夫ですかね？」

グラハム「さあな。私に聞くな」

マヤ「ですよね」

こうしてガデラーザ開発計画がスタートした。

ガテラーザ開発計画、始動。（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

コメントで今後の展開、出してほしいMS、パイロットなどを募集します。

あとソルブレイヴス隊員は出す予定です。

シンジ襲来と技術開発部の苦悩・技術力（前書き）

一日続けて投稿です。 ネルフの技術力・・・恐ろしい・・・

シンジ襲来と技術開発部の苦悩・技術力

司令室を訪れたリツコ。

だが居たのは副司令しか居なかつた。
まあいか書類渡すだけだし。

リツコ「副司令。頼みたいことが」

冬月「ん?なんだね?リツコ君」

リツコ「EVAだけでは戦力に欠けるのではと思い、彼、グラハム・エーカー少尉の世界の機体データを基に1機作ろうと思つのですが。
・・」

冬月に書類を渡した。パラパラめくる。

冬月「全長302mか・・・これだけの大きさでこのスピード・・・
彼の世界の技術はすごいな」

リツコ「まさに動く武器庫ですからねえ」

冬月「ふむ、1機だけなら金額的に大丈夫だろう。頑張ってくれ」
リツコ「充分です。ありがとうございます!・・・所で司令はどうぢ
らに?」

冬月「ああ、碇は、彼、の説明に行つているよ」

こちらは一通り説明が終わつたゲンドウ。

いつの間にか來ていた冬月に話しかけられる

冬月「碇。後戻りはできんぞ」

ゲンドウ「わかっている。人類には時間が無いのだ」

技術開発部技術局第一課の部屋。

リツコが居ない間に先程見れなかつた所を見ているグラハムとマヤ。

マヤ「サバー二ヤ、これも武装が多いですね。次は・・・・・！？」

急にマヤが黙つたのでどうしたのかと画面を見てみるとそこには・・・

青いブレイヴが特攻する所だった。

マヤ「・・・・・か・・・・・・・・」

グラハム「か？」

マヤ「かつこいい！」

グラハム「は？」

マヤ「未来への水先案内人は、このグラハム・エーカーが引き受けた！くうう何て痺れること言つてくれるんですか！そこに痺れる！憧れるう！」

このオペレーターも大丈夫か？

そんなことを思つていたら自然に口が開いてしまつた。

グラハム「こんなオペレーターで大丈夫か？」

マヤ「大丈夫だ問題ない！」

リック「大丈夫じゃない！大問題よ！」

その場に笑い声が響く・・・・・

マヤ「それで先輩。OK出ましたか？」

リック「ええ、出たわよ。一機だけなら良いつて」

マヤ「これで本格的な作業に入れますね」

リック「相変わらず仕事が速いわね。そうだ、この機体のパイロットは？」

グラハム「デカルト・シャーマン大尉だつたかな。私がもう少し早く来ていれば・・・・・・・」

一瞬暗い雰囲気が漂つたがマヤが何か閃いたようだ。

マヤ「これは私の推測ですが彼もこの世界に来ている可能性があるのでは？」

リック「そんな都合よく居るものかしらねえ」

グラハム「出来る限り私も探してみよう。隊員も含めて」

リック「ソルブレイヴス隊・・・すゞい連携ね」

グラハム「お褒め頂き光栄だな」

その日、既に暗くなつていたので解散となつた。

夕飯の材料が無いため、近くのスーパーに買い物に行つた。

グラハム「ふむ、今日はカレーにするか」

と思い、一つだけ残つたカレーの元に手を伸ばす。

じゃがいも・人参・玉ねぎ・肉をカゴに入れる。

その後、包丁やまな板が意味がないと気づきカゴに入れる。そのままレジへ。

グラハム「よし、これ位で良いだらう。帰るか・・・ん？」

帰り際に一組の男女を確認した。赤いジャケットを着ているのは・・・

・葛城一尉だな。その隣に居るのは間違いない、碇シンジだ。
声をかけてみる。

グラハム「葛城一尉」

ミサト「ん？あ、誰かと思つたらグラハムじゃない。あなたも買い物？」

グラハム「ああ、さすがに三食ずっと食パンじや嫌だからな」

ミサト「『ゴメン』『ゴメン』。ふむ、今日の夕飯はカレーか・・・奇遇ね。

「こちらもカレーよ」

料理の話をしていると少年が話に加わってきた。

シンジ「あの～ミサトさん、この人は？」

ミサト「まだ言つて無かつたわね。この人はグラハム・エーカー少佐よ。シンちゃんを助けた人よ」

グラハム「グラハム・エーカーだ。よろしくな」

シンジ「碇シンジです。こちらこそよろしくお願ひします」

翌日、技術開発部技術局第一課から呼び出された。

ガデラーザの砲身とGNドライブ×7個が出来たとのことである。恐るべしネルフの技術力・・・

リック「GNドライブは一つ出来れば量産は簡単だつたわよ。ただ・
・・」

グラハム「ただ？」

マヤ「ガデラーザのフレームの大きさはまだ何とか出来ますが、武装が思つたよりも難しいんですよ。開発部総出でやってますが大型GNファングしかできていません。小型はまだ半分以下です」

グラハム「大型が親機か・・・小型をどうやって射出するかだな」
マヤ「全部脳で制御していますからねえ。本人が居ないと何とも」

窓からケイジを覗くと大勢の開発部の人々がフレーム+クラスター式ミサイル製造班とファング製造班に分かれて作業している。その隣にはGNドライブが7個。

カタギリもこの位苦労していたんだな。
そう思つグラハムであった。

シンジ裏来と技術開発部の苦悩・技術力（後書き）

お読みいただきありがとうございます。引き続きM&Pアイロジットの募集をしております。

コメントで教えて下さい。ではまた次回。

シャムシエル襲来前編（前書き）

今回は前編後編に分けました。前回はエルシャダイネタ今回はジョ
ジヨネタがありますwwwwww

デカルト大尉は一体どこに居るのやら（何故か居ること前提）

グラハム「捜索初日は山を探すとしよう。もしかしたら野宿しているかもしれない」

？？？「は、は、は、ハックショーン！誰か私の噂をしたな・・・ううつ寒い・・・」

あ、ありのまま今起こったことを話す！

私は宇宙に居たと思ったらいつの間にか地上の川の中に居た！な、何を言っているのかわからないと思うが私も何をされたのか分からなかつた・・・

頭がどうにかなりそうだった・・・（ELS的な意味で）

ガンダムだとトランザムバーストだとそんなチャチなもんじゃあ断じてない
もつと恐ろしいものの片鱗を味わつた・・・・（＊あのボーズで言っています）

彼の名はデカルト・シャーマン。イノベイターである。先程までは宇宙に居たのだがガデラーザがELSに侵食されている時に意識を失い、気が付いたらここに居たわけである。

デカルト「兎にも角にもここから出なければ・・・」

こちちはデカルトが居る川より少し奥の方の川にいるグラハム。

グラハム「人の気配が・・・何処だ何処に居るんだ！」

グラハムとデカルトの現在位置。

グラハム現在位置

動き回っている内に暗くなってしまったため仕方なく野宿することに。グラハムは野宿の準備をしていたためぐっすり眠れたがデカルトはそんな物は無かつたため、ブルブルしながら寝てはいけない×
10を唱えていた。

二
三
四
五
六

グラハム「どこにいるのだ・・・気配はするというのに・・・デカルト・シャああああまああン！！」

デカルト「私を呼ぶ声が！？やはり私以外にも人が・・・？」

グラハム「……ああ、目の前にハワードとダリルが見える……今行くぞ……いや待て。今行つたら死ぬのではないか?しつかりしる。私は軍人だぞ。この程度で惑わされてどうする……」

自分の顔を叩いて引き続き検索を始めるグラハムだった。

デカルト「中々出口が見つかん。どうしたものか……ん？」

彼の瞳に映つたのは見た目三十代前後の金髪の男性だった。

デカルト「あの軍服……連邦の者か？」

助かつたと思い駆け寄つていく。寄つてきたことに気付いたグラハム。

グラハム「……シャーマン大尉か？」

デカルト「ああ、そうだ。貴官は？」

グラハム「グラハム・エーカー少佐だ」

デカルト「では貴官があのフラッグのパイロットか……噂は聞いている」

グラハム「ほほう、どんな噂かな？」

デカルト「一時期仮面を付けていたこと。というかそれしか聞いていない」

グラハム「…………」

グラハムは黙つてしまつた。慌ててデカルトは別の話題に切り替える。

デカルト「貴官も気づいたら山に居たのか？」

グラハム「いや、私は貴官を探しに来た」

デカルト「私を？」

一方こちらは第壱中学校。

今は数学の時間。数学なのに途中から話が脱線し、セカンドインパクトの話をしている。

僕は何もやることが無いのでただぼうっとしているだけだ。そんな時、パソコンの画面に「A」这种文字が点滅している。とりあえづクリック。

『碇君があのロボットのパイロットというのはホント?』

『ニヤニヤホントなんでしょ？』

「ううん……ちがいためりて言われたけど……」

Y
E
S

ええええええええええええええ！？
という声が響き渡った。

昼休み

男子生徒に所謂表行こうか状態に陥つた。そして急に殴られたわけである。

トウジ「すまんな。転校生。わしはお前を殴らなあかん。殴つとか
な気が済まへんのや」「

ケンスケ「悪いね、この間の騒ぎで、トライシの妹さん、怪我しちやつてしまふ。・・・まあ、そういうこと」とにかく

シンジ一 僕だって、乗りたくて乗ってるわけじゃないのに・・・」「

そして再び殴られた。その後、サイレンが鳴った。使徒かな……
学校の校舎から綾波が出て来た。

綾波「非常召集、先、行くから」

ネルフ本部に帰還したグラハム。

グラハム「騒がしいな」

リック「第四使徒よグラハム。 ?隣の人は?」

デカルト「デカルト・シャーマン大尉であります」

リック「マヤの予想どうりね」

シゲル「目標を光学で捕捉、領海内に侵入しました」

冬月「総員、第一種戦闘配置」

マヤ「了解、対空迎撃戦、用意!」

マコト「第三新東京市、戦闘形態に移行します」

マヤ「中央ブロック、収容開始」

建物の収納が始まった、だがそれもすぐに終わった。

シゲル「政府、及び関係各省への通達、終了」

マヤ「目標は、依然侵攻中。現在、対空迎撃システム稼働率は48%!」

ミサト「非戦闘員及び民間人は?」

シゲル「既に退避完了」との報告が入っています」

デカルト「少佐。使徒とは?」

グラハム「さあな。私にも良くわからん」

とあるシェルター。

ケンスケ「ううつ、まだだ!」

トウジ「また文字だけなんか?」

ケンスケ「報道管制つて奴だよ。僕ら民間人には見せてくれないんだ、こんなビッグイベントだっていうのに!」

ミサト「碇司令の居ぬ間に、第四の使徒襲来。意外と早かつたわね」
マコト「前は15年のブランク。今回はたったの三週間ですからねえ」

ミサト「うちの都合はお構い無し、か。女性に嫌われるタイプね」
冬月「・・・税金の無駄使いだな」

シゲル「委員会から再び、エヴァンゲリオンの出動要請が来てます」

ミサト「うむをこやつらぬ、言われなくとも出撃させるわよ」

マヤ「エントリー、スタートしました。LCC、転化。発着ロッカ、
解除」

シンジ「（父さんがいないのに、なんでもまた乗つてるんだろ？）
・人に殴られてまで・・・。」

ミサト「シンジ君、出撃。いいわね？」

シンジ「はい・・・」

リック「よくつて？敵のA・T・フィールドを中和しつつ、パレットの一斉射。練習通り、大丈夫ね」

シンジ「はい」

ミサト「発進！」

初号機が勢いよく打ち出された。

ミサト「続けてブレイヴを出すわ！グラハム少佐！」

グラハム「問題ない。グラハム・エーカー、出るぞー！」

ブレイヴは巡航形態のまま射出された。

グラハム「くつ・・・Gが・・・」

もの凄いGが体かかっている。ガンダム戦ほどではないが。

神社で使徒を見つめている少年が一人いた。

ケンスケ「すごい、これぞ苦勞の甲斐もあつたといつものー。」

その数秒後、エヴァ初号機が出てきた。

ケンスケ「おっ！待つてましたあ！・・・出た！」

オペレーター「A・T・ファイールドを展開」

シンジ「目標をセンターに入れてスイッチ、目標をセンターに入れてスイッチ・・・」

リック「作戦通り。いいわね、シンジ君？」

シンジ「はいっ」

射出ジルの中から出ると同時にパレットライフルを一斉射。だが・・・

ミサト「馬鹿、爆煙で敵が見えない！」

ミサトの声と同時にブレイヴが飛び出してきた。そのまま空中変形。グラハムが見たのは第四使徒の攻撃で倒れている初号機だった。

トウジ「あのロボット・・・新聞で見たワイ。それにあつちはもつやられるとるでえ？」

ケンスケ「一体何者なんだ・・・いやまだ転校生は大丈夫だよ」

後編へ続く。

シャムシエル襲来前編（後書き）

お読みいただきありがとうございました。後編へ続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4415p/>

新世紀グラハムゲリオン

2011年1月2日19時40分発行